

大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：坂本 一真（臨床心理学コース）

■ 研究題目
いじられ経験の類型化と反応行動・心理的適応の関連の検討 —自尊感情・無条件の自己受容・共同体感覚に着目して—
■ 研究代表者・分担者 氏名
坂本 一真（臨床心理学コース）（代表者）
■ 研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）
【問題と目的】 社会的存在である我々にとって、集団の中に自己を位置づけ他者と良好な関係を構築することは、常に重要な関心事である。多様な他者との共生を目指す社会動向が形成されるとともに、現代青年は他者と適度な距離を保った表面的で享乐的な「群れとしての友人関係」を結ぶようになった（栗原, 1989; 岡田, 2007; 土井, 2008）。本研究で焦点化する「いじり」というコミュニケーション方略は、集団内に享乐的なやり取りを生み出す手段であり、群れの友人関係を構築するのに役立っているようである（土井, 2008; 向井, 2010; 本田, 2012）。いじりとは、「仲間内でのコミュニケーションによる集団的遊戯であり、行為者側から傷つける意図は無いことが伝達されながらも、被行為者を挑発し困らせる行為」である。先行研究からは、いじりが現代青年の心理的適応に対して、相反する機能を持つことが示されてきた。例えば、適応促進的側面として、いじりのやり取りへの参加が「いじる役-いじられ役」というような集団内役割の獲得を促進し、所属感や自己肯定感を高めているとされる（向井, 2010）。一方、適応阻害的側面として、被行為者が自身の感情を抑圧し、集団内の「ノリ」を優先させ自らいじられ役を担い続けることで、希死念慮を抱くほどの心理的不適応に陥ったケースが示されている（土井, 2008; 中野, 2018）。このように、いじりが持つ機能については議論が分かれており、どのような場合にいじりが心理的適応を促進/阻害するのかについては、実証的に検討する必要がある。ところで、いじりを対人関係上のストレスラーとして位置づけ、Lazarus & Folkman (1984) のストレス理論のパラダイムに当てはめると、いじりに対する認知的評価が、その後の行動や心理的適応などのアウトカムを規定すると考えられる。よって本研究の目的は、いじりの被行為者による主観的な認知的評価である「いじられ経験」

を被行為者によるいじりリスク認知から類型化し、いじりに対する反応行動と心理的適応指標との関連を検討することである。本研究では「いじられ経験」を“1) 仲間内での遊びとして認識していたこと、2) 行為者に傷つける意図は無いと認識していたこと、3) 程度の差はあれ困った思いを経験したこと、の3点を満たす経験”として定義した。

【実施内容・方法】

18～35歳の397名（男性229名、女性166名、その他2名、平均28.74歳）を対象に直近の「いじられ経験」について、クラウドソーシングサービスを利用し質問紙調査を実施した。調査時期は、2021年7月である。本調査は、東北大学大学院教育学研究科研究倫理審査委員会の承認を受けた（承認ID：20-1-010）。

調査内容は、1) 基礎情報（性別・年齢・職種・学年）、2) Instructual manipulation check（読み飛ばし等の努力の最小限化をチェックする項目）、3) 想起したエピソードに関する質問、4) 想起したエピソードの具体性に関する操作チェック項目、5) 想起したエピソードと定義と一致度の確認、6) いじりのリスク評価尺度 PartA 侵襲性（坂本，2020）：否定的情動反応、アイデンティティの侵害の2因子構造。得点が高いほど侵襲性が高い、7) いじりのリスク評価尺度 PartB 行動抑制尺度（坂本，2020）：リスク認知、無力感、役割演技の優先の4因子構造。得点が高いほど行動抑制に関わる認知の程度が高い、8) 特定の状況における冗談に対する反応尺度（葉山・櫻井，2010）：迎合的反応、回避的反応、感情表出反応の3因子構造、9) 共同体感覚尺度（高坂，2011）：所属感・信頼感、自己受容、貢献感の3因子構造、10) 無条件の自己受容尺度（吉田・雨宮・坂入，2019）無条件性、安定性の2因子構造、11) Rosenberg 自尊感情尺度（Mimura & Griffith, 2007）：単因子構造、得点が高いほど自尊感情が高い。

【結果】

〈いじられ経験の類型化〉

いじりのリスク評価尺度 PartA「侵襲性尺度」の2因子、および PartB「行動抑制尺度」の4因子の標準化した下位尺度得点をもとに、Ward 法ユークリッド平方距離によるクラスター分析を行い、いじられ経験を類型化した。また、クラスターを独立変数、いじりのリスク評価尺度を従属変数とした一元配置分散分析をおこない、各クラスターの特徴を検討した（Figure1）。その結果、3クラスターを抽出した。第1クラスター（n=108）は、侵襲性やリスク知覚や無力感の程度が低く、利益享受の程度が高いことが特徴であるため、「ローリスク・ハイリターン群（LH）」と命名した。第2クラスター（n=203）は、否定的情動反応が高く、アイデンティティの侵襲は中程度、利益享受と役割演技の優先の程度が低いことが特徴であることから「ハイリスク・ローリターン群（HL）」と命名した。第3クラスター（n=86）は、すべての得点が高いことが特徴であり、いじりによって強く侵襲され

ながらも、いじりによる利益享受も高いことから「ハイリスク・ハイリターン群 (HH)」と命名した。

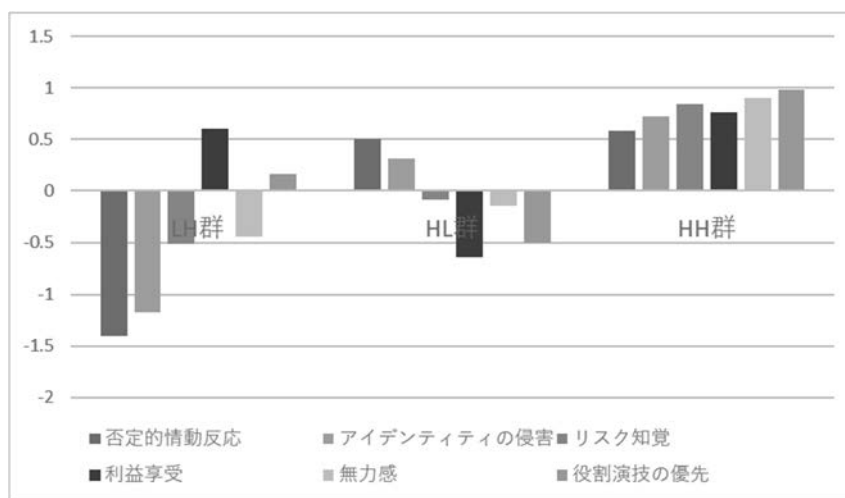


Figure1. いじられ経験の3類型とその特徴

〈いじられ経験の類型と反応行動および心理的適応の関連の検討〉

いじりの類型を独立変数、冗談に対する反応尺度、共同体感覚尺度、無条件の自己受容尺度、自尊感情尺度を従属変数とした、一元配置分散分析を行った (Table1)。その結果、感情表出反応 ($F(2,394)=15.621, p<.001$)、迎合的反応 ($F(2,394)=43.114, p<.001$)、回避的反応 ($F(2,394)=35.993, p<.001$)、所属感・信頼感 ($F(2,394)=22.188, p<.001$)、自己受容 ($F(2,394)=8.224, p<.001$)、貢献感 ($F(2,394)=7.597, p<.001$)、安定性 ($F(2,394)=9.546, p<.001$) で有意差が見られた。自己受容の無条件性、及び自尊感情では有意差が見られなかった。有意差が見られた分析において、多重比較を行ったところ、a) LH は他の群より感情表出反応が高いこと、b) HH は他の群より迎合的反応が高いこと、c) 回避的反応は、HL>HH>LH の順で低下すること、d) LH は他の群より所属感・信頼感が高いこと、e) LH は他の群より自己受容が高いこと、f) LH は HL に比べて貢献感が高いこと、g) 自己受容の安定性は LH>HL>HH の順で低下すること、が示された。

Table1. いじられ経験の類型を独立変数とした一元配置分散分析の結果

従属変数	LH群 (n=108)		HL群 (n=203)		HH群 (n=86)		F	p	結果
	平均	SD	平均	SD	平均	SD			
感情表出反応	1.616	0.624	2.218	1.003	2.047	0.964	15.621	****	LH>HL・HH
迎合的反応	3.139	0.808	3.161	1.036	4.171	0.613	43.114	****	HH>LH・HL
回避的反応	1.866	0.855	2.897	1.130	2.506	0.935	35.993	****	HL>HH>LH
所属感・信頼感	3.398	0.937	2.668	0.909	2.857	0.941	22.188	****	LH>HL・HH
自己受容	3.304	1.112	2.801	1.005	2.861	1.148	8.224	****	LH>HL・HH
貢献感	3.346	1.000	2.900	0.951	3.128	0.989	7.597	****	LH>HL
無条件性	4.032	1.477	3.617	1.447	3.654	1.608	2.909	n.s.	—
安定性	4.151	1.273	3.799	1.199	3.384	1.174	9.546	****	LH>HL>HH
自尊感情	2.658	0.302	2.634	0.317	2.711	0.327	1.8	n.s.	—

**** $p<.001$

【考察】**〈いじられ経験の類型の特徴と反応行動の関連について〉**

まず LH 群は、いじりのやり取りに適応している群であると考えられる。LH 群の特徴は、いじりに対する率直な反応を返しており、仲間集団内で情緒的で共感的な絆を感じており、このような友人関係の中で失敗や非難されることがあっても安定的に自己受容していることであった。概して、最も心理的適応が良い群であった。率直な感情表出は、いじりのエスカレートや、不均衡な関係性の構築を抑制する機能があると考えられ、対人関係システムにおける自己制御性が機能していることの現れであると考えられる。被行為者の、感情表出へのリスク知覚や、状況への無力感を生じさせないことが、率直な感情表出反応を促進し、友人関係内の自己制御性を機能させると考えられる。

次に HL 群はいじりのやり取りに参加しない群であると考えられる。否定的情動反応が高程度であるのに対し、アイデンティティの侵害は中程度であることから、いじりに対する一時的な不快な情動反応は経験するものの、継続的にいじりによって侵襲されているわけではないと考えられる。HL 群の特徴は、いじりを積極的に回避しており、仲間集団に対する情緒的で共感的な絆が感じられていないことである。この群の者は、侵襲的ないじりを回避することで自我を防衛する一方で、友人関係における情緒的な交流が困難であると考えられる。この群では、被行為者が集団から排斥されるダイナミクスが生じている可能性があり、いじりが「排除型のいじめ」(内藤・荻上, 2010)として機能していると考えられる。

次に HH 群は、いじりによって侵襲されリスクや無力感を感じながらも、一方で大きな利益を感じ集団内の役割演技を優先する群であり、いじりに無理をしながら積極的に参加し居場所を確保する群であると考えられる。この群の者は「いじりで傷つきたくないが、友人関係も壊したくない」という二重拘束の状況に置かれていると考えられる。この群の特徴は、いじりに対して迎合的に反応しており、仲間集団の中で「所属感・心理感」「自己受容」をあまり感じておらず、自己受容も不安定なことである。この群の者はいじりに積極的に迎合するため、第三者からは一見適応が良いように見えるものの、実際の心理的適応は悪いことが示され、向井(2010)のいじりが所属感の源泉であるとする主張を否定するものである。この群では、仲間集団内に不均衡な関係が発生していると考えられ、いじりが「飼育型のいじめ」(内藤・荻上, 2010)として機能していると考えられる。

〈いじられ経験の類型と心理的適応の関連について〉

次に、本研究ではいじられ経験と自己受容の無条件性や、自尊感情との関連が見られなかった。これらの関連が見られなかった変数は、自己が自己に対して下す評価に関す

る内容（例：「私は、自分自身にだいたい満足している」「他の人が私を認めてくれなくても、自分には価値があると感じる」）であり、いじりは自らが捉える自己像に影響しないことが示された。これは現代青年の自己像を構成する「キャラ」という概念（土井，2009）の存在を支持するものである。土井（2009）は現代青年は自己像をアイデンティティではなく、キャラによって捉えていると指摘する。アイデンティティとは、自己の外側/内面的な要素を一貫した様相に収束させ捉えた自己像であるのに対して、キャラとは自己の断片的で一貫性のない要素を寄せ集めて捉えた自己像である。このような中で、現代青年は他者に見せる自己呈示を含む自分らしさである「外キャラ」と、社会生活の中で変化しない生来的で固定的な自分らしさである「内キャラ」を使い分けながら、多様な他者との円滑な共生と、不安定で動的な社会での生活での内的安定を両立しているとされる（土井，2009）。いじりとは、友人と形成した「群れ」の中での円滑な共生を目指して行われるコミュニケーション方略であり（土井，2008；向井，2010；本田，2012）、「外キャラ」を用いて参与されるものであると考えられる。そのため、いじられ経験は「内キャラ」には影響を与えず、よって自己受容の無条件性や自尊感情にも影響しなかったと考えられる。

【今後の課題】

今後は、いじられ経験の類型を規定する要因（例えば、スクールカースト等の勢力位置、コミュニケーション・パターン）について検討する必要がある。

【引用文献】

- 土井隆義（2008）友だち地獄-“空気を読む”世代のサバイバル-. 筑摩書房.
- 土井隆義（2009）キャラ化する/される子どもたち-排除型社会における新たな人間像-. 岩波書店.
- 葉山大地・櫻井茂男（2010）冗談に怒りを感じた場面における聞き手の反応を規定する要因の検討. 教育心理学研究, 58（4）, 393-403.
- 本田由紀（2011）学校の「空気」-若者の気分-. 岩波書店.
- 高坂康雅（2011）共同体感覚尺度の作成. 教育心理学研究, 59(1), 88-99.
- 栗原彬（1989）やさしさの存在証明：制度と若者のインターフェイス. 東京：新曜社.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984). *Stress, appraisal, and coping*. New York : Springer Publishing Company.
（本明 寛・春木 豊・織田 正美（監訳）（1991）ストレスの心理学-認知的評価と対処の研究- 実務教育出版）
- Mimura, C., & Griffiths, P. (2007). A Japanese version of the Rosenberg Self-Esteem Scale: Translation and equivalence assessment. *Journal of psychosomatic research*, 62(5), 589-594.

向井学 (2010) 「いじめの社会理論」の射程と変容するコミュニケーション. 社会学批評, 3, 3-12.

内藤朝雄・荻上チキ (2010) いじめの直し方. 朝日新聞出版.

中野田佳 (2018) 上司の「いじり」が許せない. 講談社現代新書.

岡田勤 (2007) 現代青年の心理学-若者の心の虚像と実像-. 世界思想社.

坂本一真 (2020) いじりのリスク評定尺度の開発-信頼性・妥当性およびカットオフ値の検討-. 日本家族心理学会第37回大会発表論文集, 26-27.

吉田昌宏・雨宮怜・坂入洋右 (2019) 日本版無条件の自己受容尺度の開発および信頼性と妥当性の検討. 筑波大学体育系紀要, 42, 21-32.